近時、紫上の中品すなわち中流の女性と考える説が提案されている。これを取り上げて考えてみたい。

たしかに紫式部は、上流の女性たちにはあまり関心と熱情を持たなかったようにある。中流の女性として、先帝の女であるから、これたちは上流の中流と言えると思う。

先ず葵上について言えば、源氏はその最後には彼女をいとおしんでいるが、必ずしも幸福な夫婦とは言えなかった。

これには源氏の心に、藤壷に対する思慕があったとも思えようが、まだ源氏を引きつける魅力に乏しく、夕霧を残して早々と舞台を去ったのである。

朧月夜は源氏の須磨滝流の原因となった為、本来結ばれる仲ではなかったのである。

女三宮は先帝の皇女の降嫁として表面的には源氏の光栄のようにみえるが、この頼りない姬の剣を憂慮した朱雀院が節を誓って、後見として源氏に頼み込んだのである。

そして柏木との事件によってやがて出家入道したのであるから、結果的には自滅したとも言えるであろう。

寄木の巻において馬頭が、思いがけないところで思いの外の美しい人がいるのを聞いたのは、限りなくめずらしく思われると語り続けているのを聞いて、源氏は「いでや、上の品と思ふにだに難げなる世を」と思っている。これは葵上を念頭に置いてのことかも知れないが、紫式部の考え方であろう。源氏物語語には、皇女や権門の娘について描くところは比較的少ないのである。
しかしながら、主人公紫上の中品と言えるであろうか。時松信弘氏は、近時「源氏物語の主函と構造」において、萩原広道らが帯木・空顔・夕顔三巻を一括する説に反し、それに若紫・末摘花二巻を加えて一つのグループとして考されていているのである。その理由として、

帯木三帖の女の三十一品に屈すると言えるのではないか。中品の中品に屈すると言えるのだろうか。

重松信弘氏は、最近「源氏物語の主函と構造」において、萩原広道らが行木・空顔・タ顔三巻を一括する説に反し、それに若紫・末摘花二巻を加えて一つのグループとし、それに若紫・末摘花二巻を加えて一つのグループとして考えられているのである。

その理由として、「空顔・タ顔・若紫・末摘花四人は、第一に、源氏にふさわしくない中品の女であること、第二に、いずれも著者のみならず同様のものであることがその三点において、共通している。帯木三帖の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点があるので、四人を一括すべきである。帯木の女二人だけを特別に出す理由はなく、序ろ四人の女に共通する点所以で
とありがたきにも、いと胸塞る」とあって、源氏は藤壇の理想的な姿を思い続けている。更に同じ巻の、空蝉の許に忍ぶところ、女房たちが自分の噂をしているのを聞いて、「思すことのみ心にかり給へば、まう胸つぶれて、かやうついでも、人の言ふを聞きつてるる時など覚え給ふ。異なることになれば、聞きさし給ひふ」という源氏の心は、ただ藤壇に対して思慕の憫を抱いているだけではなく、人の聴きかべるあれば、心は心として事足らず、わろたる事ども出で来るわざなめれば、とりどりにことわりとあっからである。

三

構成上、空蝉・夕顔のようないわゆる中品の女性たちを描いた世界を、主題の世界に統合しようとする作者の創造的努力は認めざるを得ないが、しかしご紫を空蝉や夕顔と同列に中品と認めることがでるであろうか。馬頭が雨夜の品定めにおいて、おぼえ廃ぬものは、心は心として手足らず、わらびたる事ども出で来るわざなめれば、とりどりにことわりとあっからである。中品を選び出すことのできる上時勢であるというのである。

空蝉は人柄の聡明さと爽やかな出所進退によって、その容姿の欠点も十分に取り隠されているのである。源氏は三度まで、彼女に迫り、その後彼女を忘れてはいない。作者も空蝉のことを決して悪くは描いていないのである。

空知の父親は右衛門が雨夜の品定めにおいて、おぼえ廃ぬものは、心は心として手足らず、わらびたる事ども出で来るわざなめれば、とりどりにことわりとあっからである。中品を選び出すことのできる上時勢であるというのである。
門督（中納言）であったが、既に故人になっている。馬頭の定義からするならば、空郷は典型的な中の品の女ということになるのである。常夏の女は三位中将の姫であることである。それが源氏に見出された夕顔であるが、その出自を慮るとならば、彼女も典型的な「中の品」の女性である。そして「中の品」ということは、行木の巻の雨夜の品定めにおいてのみ用いられる語である。若菜上の巻において、夕霧の姿を描いて「物渭げなるうちとけ姿に、花の雪のやうに降りかかれば、うち見上げて、しこれた枝すこし押し折りて、御階の中のしなの程に居給ひぬ」とある場合の「中のしな」は、全く別である。これを除けば帯木の巻の五例のみである。末摘花の系統を引く者として末摘花がある。これは決して血緑関係などの因縁があるのではなく、夕顔のような人の再来を望んで図らずも出逢ったのが末摘花であったというのである。従って源氏の意図としては夕顔の風趣を求めることであったが、それが末摘花に流れているわけではない。末摘花は夕顔とは全く別個の性格で、夕顔の再来を求めることであるから、そこで品定めが行われるわけはない。従って末摘花は空郷や夕顔と同等に品定めすることができない。これを見たとしてこの意図は異なっていた。作者の意図とは遠いものである。また玉覧の方は末摘花とは事情を異にし、夕顔の娘である。帯木の巻において、常夏の女としてそこに幼女があることを見たとしてこの意図は異なっていた。作者の考慮するところではなかった。今後いかなる運命が展開するかはわからないことであるから、到底品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くわけではない。しかしその幼女の品定めの対象となる人ではないのである。従って玉覧一人を取り上げて、これを中の品（中流とする説を聞くにくい。
このように最期まで源氏物語を愛し、その研究に没頭された崇裔なまでの姿を誇るぺく、御過族のお許しを得て、ここに先生の絶策としてとれを掲載した次第である。

（工藤進思郎）